

小熊英二『生きて帰ってきた男』

本書の副題は「ある日本兵の戦争と戦後」であり、岩波新書として2015年6月に刊行された。400ページ近い新書であり、じつに読みごたえがある。入院中にじっくり読んだ。表紙カバー裏から一とある一人のシベリア抑留者がたどった軌跡から、戦前・戦中・戦後の日本の生活模様がよみがえる。戦争とは、平和とは、高度成長とは、いったい何だったのか。戦争体験は人々をどのように変えたのか。著者が自らの父・謙二(1925-)の人生を通して、「生きられた20世紀の歴史」を描き出す。

謙二の軌跡よりも、「あとがき」から本書の意義を紹介しよう。

この本は二つの点で、これまでの「戦争体験記」とは一線を画している。その一つは、戦争体験だけでなく、戦前および戦後の生活史を描いたことである。多くの「戦争体験記」は、戦前および戦後の記述を欠いている。そのため、「どんな境遇から戦争に行ったのか」

「帰ってからどう生きていったのか」がわからない。それにたいし本書では、戦前および戦後の生活史を、戦争体験と連続したものとして描いた。それを通じて、「戦争が人間の生活をどう変えたか」「戦後の平和意識がどのように形成されたか」といったテーマをも論じている。二つめは、社会科学的な視点の導入である。同時代の経済、政策、法制などに留意しながら、当時の階層移動・学歴取得・職業選択・産業構造などの状況を、一人の人物を通して描いている。本編は一人の人物の軌跡であると同時に、法制史や経済史などを織り込んだ、いわば「生きられた20世紀の歴史」である。また本書の対象人物は、都市下層の商業者である。記録が多く残りがちな高学歴中産層ではない。そのため、「学徒兵から会社員へ」という、多くの戦争体験記とは異なった軌跡を記述することになった。これに社会科学的な視点を加えたことで、日本現代史の研究に独自の貢献をなした部分もあろうかと思う。

近年では、戦争の時代だけでなく、戦後史や高度成長期への関心も高まっている。社会の中軸が、高度成長期以後に生まれた世代になっていることを考えれば、それは当然のことだ。また格差問題の台頭や経済成長の終焉とともに、昭和期の経済成長や産業構造変化が、民衆生活にどのような影響を与え、社会秩序をどう変えたのかにも関心が集まっている。本書では、こうした現代的な関心と、戦争体験という歴史的な関心を、接続しようと試みた。戦争体験を描くにしても、一人の人物の軌跡を通じて、戦前史および戦後史と接続すれば、従来よりも幅広い関心を集めうると考えたのである。学術的にいえば、本書はオーラルヒストリーであり、民衆史・社会史である。社会的にいえば、「戦争の記憶」を扱った本であると同時に、社会構造変化への関心に応えようとしたものである。

本書を読んで、わが父の戦前・戦中・戦後を考えさせられた。 (2016年1月4日)

